TAD Letter | 07

富山県美術館
Toyama Prefectural Museum of Art and Design

開催中の展覧会

チェコ・デザイン 100年の旅

2019年6月1日（土）– 7月28日（日）

ポスター Design : TSDO Inc.

チェコ国立プラハ工芸美術館の企画により、同館の所蔵作品を中心に、19 世紀末から現代 までのチェコ・デザインを紹介する展覧会です。この約100年間のチェコでは、アール・ヌーヴォーの旗手として知られるアルフォンス・ミュシャ、キュビスムの影響を受けた建築、チャペック兄弟の絵本、そして世界で愛されるアニメーションなど、社会主義の時代にも、その優美なデザインは独自の道を拓いていきました。ボヘミアン・グラスなどチェコ独自の 産業や民族的な造形と、多様な芸術表現が融合したデザインの世界は、現代でも多くの人々を魅了し続けています。本展は、チェコ・デザインを総合的に紹介する、日本初の展覧会となります。家具、食器、ポスター、おもちゃ、書籍など約 250 点で辿るチェコ・デザインの世界を、小さな旅のようにどうぞお楽しみください。

開催概要

開館時間	9：30–18：00（入館は17：30まで）
休 館 日	毎週水曜日、7月16日（火）
会　　場	富山県美術館 展示室2、3、4
主　　催	富山県美術館、チェコ国立プラハ工芸美術館、北日本新聞社、北日本放送
特別協力	株式会社インテック
観 覧 料	一般 900（700）円、大学生 450（350）円、高校生以下無料 ※（）内は20名以上の団体料金

関連イベント

※詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。内容等は都合により変更する場合があります。

01 担当学芸員によるギャラリーツアー

日　　時　2019年6月8日（土）、22日（土）、7月6日（土）、15日（月・祝）各日14：00–
会　　場　2階展示室2、3、4 ※展覧会入口にお集まりください。（要当日有効の企画展チケット）

02 こどものためのギャラリーツアー

日　　時　6月16日（日）、7月27日（土）各日14：00–
会　　場　2階展示室2、3、4 ※展覧会入口にお集まりください。（要当日有効の企画展チケット）

見どころ

主要作品紹介

02
パヴェル・ヤナーク
《クリスタル（結晶）型小物入れ》1911年
チェコ国立プラハ工芸美術館蔵

01
アルフォンス・ミュシャ
《ジスモンダ》1894-1895年
チェコ国立プラハ工芸美術館蔵

03
ヴァーツラフ・シュパーラ
小箱《悪魔》1921年
チェコ国立プラハ工芸美術館蔵

01

アルフォンス・ミュシャ《ジスモンダ》1894-1895年
フランスの舞台女優サラ・ベルナールの依頼により制作された、ミュシャが初めて手掛けたポスターです。演劇「ジスモンダ」でヒロインを演じるサラ・ベルナールの姿を描いており、背景の細やかなモザイク模様やビザンチン風の豪奢な衣装など装飾性が高く、まさにアール・ヌーヴォーを代表する作品といえます。

02

パヴェル・ヤナーク《クリスタル（結晶）型小物入れ》1911年
陶器で作られたこの小物入れは、三角形の面だけで形作られています。同時代の絵画の動向であるキュビスムを彷彿とさせるとともに、デザイナーは結晶という自然の形に影響を受けています。黒い稜線がアクセントとなって、非常にユニークな形をした作品です。

03

ヴァーツラフ・シュパーラ、小箱《悪魔》1921年
このユーモラスな小箱の、赤と黄、黒、白という彩色や幾何学的な造形からは、このデザインを手がけた画家が、フォーヴィスムやキュビスムから影響を受けたことが伝わります。その造形のなかにはどこか素朴な雰囲気があり、悪魔という恐ろしいイメージはなく、むしろ親しみ深い個性的な表情が特徴的です。

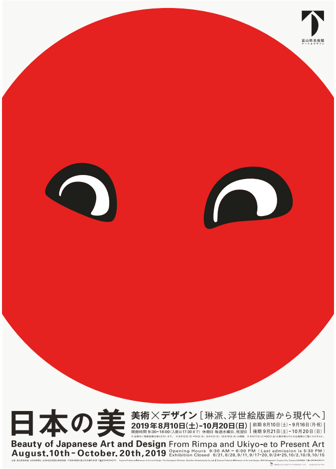
担当学芸員より

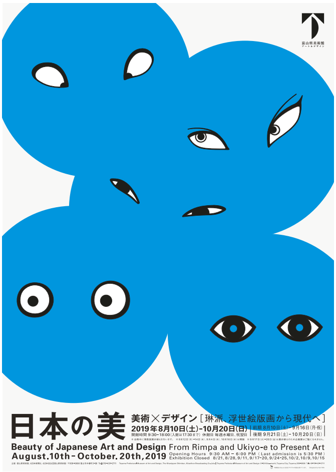
展覧会初日にはチェコ国立プラハ工芸美術館館長ヘレナ・ケーニクスマルコヴァー氏に、同館と所蔵作品についてチェコ・デザインをテーマにご講演いただきました。普段お聞きすることのできない、チェコの文化や歴史のお話もされ、会場は大盛況でした。
本展は当館ふくめ5会場での巡回開催ですが、ケーニクスマルコヴァー館長の「ぜひ富山を訪れたい」との嬉しいご希望で実現したご来県です。併設展示「アルフォンス・ミュシャ―株式会社インテック所蔵作品より」やデザイン展示室で東欧を中心としたポスターの展示もご覧になるとともに、富山市ガラス美術館と富山ガラス造形研究所も訪問されました。

次回開催の展覧会

日本の美　美術×デザイン　－琳派、浮世絵版画から現代へ－

2019年8月10日（土）－10月20日（日）　前期 8月10日（土）－9月16日（月・祝）　後期 9月21日（土）－10月20日（日）





日本の美 美術×デザイン－琳派、浮世絵版画から現代へ－　　ポスター Design : 三木 健

日本美術のもっとも大きな特徴は、その装飾性にあるといわれています。日本人は、古来より自然の美しい姿を形象化してさまざまな装飾的な表現を生み出してきました。その表現を活かした染織、陶器や漆器などの調度品、屏風や襖といったインテリアなどは生活と密接な関係にありました。また、日本美術は表現の単純化や金銀・色彩によるかざりの美により、デザイン的にも独自のスタイルを生み出しました。とくに「琳派」は、やまと絵の伝統を基盤に置きながら、斬新な表現と装飾性の強い大胆な構図により一頂点を築き上げます。庶民芸術として開花した「浮世絵」は、絵師と職人の共同作業による版画を通じて出版業界と結びつき、海外に渡りジャポニスムを巻き起こしました。本展では、日本美術の装飾性に着目し、琳派など近世の美術から浮世絵版画、近現代日本美術、現代デザインまで、和の美意識にあふれた豊かな表現による作品の数々を前・後期に分けて紹介します。とくに浮世絵版画は、特徴的な描き方を選び出し、その表現の多様性を提示します。古今の優品によるアートとデザインの競演を心ゆくまでご堪能ください。

開催概要

開館時間	9：30－18：00（入館は17：30まで）
休館日	毎週水曜日、祝日の翌日、ただし8月12日（月）-14日（水）、9月4日（水）、10月16日（水）は開館。 ※9月17日（火）-20日（金）は展示替えのため、企画展はご覧になれません。 ※作品保護のため、会期中に複数回展示替えを行います。
会場	富山県美術館 展示室2、4
主催	富山県美術館、北日本新聞社、北日本放送
観覧料	一般 1,300（1,000）円、大学生 650（500）円、高校生以下無料 ※（）内は20名以上の団体料金

関連イベント

※詳細は当館ウェブサイトをご覧ください。内容等は都合により変更する場合があります。

01	福井江太郎 ライブペインティング	日　時 会　場	2019年8月10日（土）14：00-（約45分） ホワイエ（予定）。椅子席は要企画展チケット提示
02	茂山千五郎・ 茂山千之丞と 山本太郎による トークセッション	日　時 会　場	2019年9月21日（土）14：00-（約90分） 3階ホール（定員約100名、先着順、要企画展チケット提示）
03	学芸員による ギャラリー・トーク	日　時 会　場	会期中の毎週土曜日 11：00-（約30分） 展示室 4、2（要当日有効の企画展チケット）

見どころ

主要作品紹介

01 加山又造《群鶴図》1988年
キリンホールディングス株式会社蔵

02 酒井抱一
《四季花鳥図》
江戸時代
京都国立博物館蔵

03 喜多川歌麿
青楼七小町《若那屋内白露》
江戸時代
光ミュージアム蔵

01

加山又造《群鶴図》1988年　キリンホールディングス株式会社蔵
光琳をはじめ抱一、其一へと琳派の絵師に継承された群鶴図。加山は釧路に取材し、丹頂鶴の優雅さを装飾的に表現しました。プラチナ箔の重厚な下地がリズミカルな構成で描かれた鶴の姿を際立たせています。

02
※前期のみ展示

酒井抱一《四季花鳥図》江戸時代　京都国立博物館蔵
江戸で琳派を再興した抱一の名品。四季それぞれの草花に鳥が遊ぶ情景が明快に描かれていますが、時の流れと別々の場面を一つの画面に描くために、金砂子のかすみで区切るという技法が用いられています。

03
※前期のみ展示

喜多川歌麿　青楼七小町《若那屋内白露》江戸時代　光ミュージアム蔵
青楼とは吉原遊郭のことで、その吉原を代表する7人の遊女を美女の代名詞「小町」になぞらえて描いた7枚揃い物の1枚です。上半身アップで美人を描く「美人大首絵」で一世風靡した歌麿による歌麿美人の典型です。

担当学芸員より

次ページにて改めてご報告しますが、この「日本の美　美術×デザイン」より、富山県美術館の企画展ポスターを、グラフィックデザイナーの三木健氏にご担当いただくこととなりました。ポスターのデザインにあたり、展覧会内容をお伝えしたところ「日本の美、そして“美術×デザイン”を、展覧会に来たくなるようなイメージとして伝えたい」との思いを語っていただきました。担当学芸員一同心待ちにしていたポスターが届いたとき、鮮やかな色のなか、日本美術を象徴するようないくつもの目と“目が合って”驚くとともに、皆笑顔になってしまいました。

トピックス

TADのポスターを、三木健氏が担当します！

三木 健　Ken Miki

企画展「日本の美」より、当館のポスターのデザインを三木健氏が担当することとなりました。三木氏は、大阪を拠点に国内外で活躍するグラフィック・デザイナー。昨年の「ポスタートリエンナーレトヤマ2018」では、第一次・第二次審査員を務めていただきました。今回は、テーマである“日本の美”を“琳派、浮世絵版画から現代へ”までを見つめる多彩な視点を表現されたとのこと。琳派や浮世絵から飛び出し、時空を超えて現れた目がこちらを見つめて美術館へと誘います。精緻なデザインに新しい発見と驚きを仕掛けた三木氏が、これから手掛けるTADのポスターにご期待ください。

また、「TAD LETTER」も、今号から三木氏のデザインで新しくなりました。

イベント開催報告

「わたしはどこにいる? 道標（サイン）をめぐるアートとデザイン」展関連イベント

開幕初日の「葛西薫×廣村正彰×色部義昭 オープニング記念鼎談」(3/9)では、デザインの第一線で活躍する3名より、自身の作品やサインデザインの考え方についてお話しいただきました。色部さんと木住野彰悟さん（6D）は、サインを工作し館内に設置する子ども向けワークショップ「目印と矢印をつくろう」(4/29) も行いました。佐藤修悦さんは、美術館プロムナードでの案内板公開制作や、「ガムテープ文字をつくろう」(3/24) を通して、ガムテープ文字をつくる秘訣を参加者に伝授。「三遊亭歌太郎×田村友一郎落語会」(4/20) では、田村さん作の新作落語「十戒」の口演と解題が行われました。「富山と台湾をあるく～秋山さやかの足あと」(5/12) では、秋山さんが台湾と富山の旅を紹介、歌手の一青窈さんのメッセージも披露されました。

「葛西薫×廣村正彰×色部義昭 オープニング記念鼎談」より

佐藤修悦さんによる案内板公開制作の様子

アトリエへおいでよ

| オープンラボ |

01 平日

参加無料

「カラフルコラージュ」
色とかたちにリズムを感じよう

開催日　5月23日（木）-8月6日（火）の平日
活動時間　10：00-16：00
会　場　富山県美術館3階ラボ（アトリエ内）

02 土日祝

参加無料

アコーディオンどうぶつをつくろう！

開催日　5月25日（土）-7月21日（日）の土・日・祝
活動時間　10：00-12：00、14：00-16：00
会　場　富山県美術館3階ラボ（アトリエ内）

イベント案内

| 開催概要 |

EVENT 01

TAD アート・レクチャー「瀧口修造没後 40年―書斎のシュルレアリスム」

瀧口修造と長い交友があり、当館展示室5でもその様子をうかがうことができる「書斎」にもしばしば招かれていた、フランス文学者・美術評論家の巖谷國士氏を講師にお招きします。瀧口修造の人と作品、書斎の様子、交友したアーティストのことなど、様々なお話をうかがいます。

日　時　2019年7月20日（土）14：00-（約90分）※開場 13：30
会　場　富山県美術館3階ホール
定　員　100名（申込不要）
料　金　無料

EVENT 02

ビエンナーレ TOYAMA2019

富山在住の平面・立体作家51名が、富山県美術館1階 TADギャラリー・富岩運河環水公園を舞台に、5つの会期に分かれて作品を展示します。各会期初日の14時から出品作家によるギャラリートークを開催するほか、出品作家によるパフォーマンスも予定しています。

会　期　2019年6月16日（日）-8月20日（火）9：30-18：00
第1期　6月16日（日）-6月28日（金）
第2期　6月30日（日）-7月12日（金）
第3期　7月14日（日）-7月26日（金）
第4期　7月28日（日）-8月9日（金）
第5期　8月11日（日）-8月20日（火）
※会期中の休館日 毎週水曜日、7月16日（火）（但し、8月14日（水）開館）、及び展示替日
会　場　富山県美術館1階 TAD ギャラリー、富岩運河環水公園
観覧料　無料

TADコレクション紹介

桃色の空に消える樹

田淵 安一

1981年 キャンバス・油絵具

桃色の空に、黄色の大地。その両方にまたがり大きく樹が描かれています。葉が青、黄、緑色の勢いのある筆致で描かれ、葉の右半分と幹と根は、白く平板な描写で独特の強い色彩が目を引く油彩画です。この絵を描いた田淵安一(やすかず)は、1921年福岡県の小倉に生まれ、当初は美術史を学ぶ目的で1951年に渡仏しました。1959年からは、フランスのパリ郊外にあるヴォアラン村にアトリエを据え、88歳で亡くなるまでこの地で制作を続けています。

田淵は、1970年代後半より〈未完の季節〉と名付けた樹の絵を連作で制作しています。2m×2mのキャンバスで、大きさも形もそろっており、作品の下方には、10㎝幅のスペクトル分析表のような色帯が描き込まれているのが特徴で、この作品もその一つです。〈未完の季節〉について田淵は、「僕のほうに四季とりどりの樹を描こうという意図は全くなかったのに、季節の方からやってきて、そこにときどきの樹を残している、(中略)数枚ならべてみると一点ごとに別々に見たときには気の付かなかった季節の連続が、軌跡となって表れるのだ。」[1]と話しています。四季折々の表情を見せる自宅の庭の景色を田淵は好み、庭を見るために書斎の石壁に穴をあけて窓をつくらせたほどでした。このアトリエで田淵は、自然の移り変わりを感じながら季節のイメージを捉えていったのでしょう。

また、次のような言葉も残しています。「このところ夜中に眼が覚めると、瞼の裏にちらつく輝点をみつめて眠りを待つことにしている。その輝点は半眠状態の中でいつか白いネガチブの樹になり重なり合う。全ての色彩を収斂(しゅうれん)して輝く白、充実した空虚、これはちかごろの僕の絵の夢だ。」[2]ネガチブという言葉から、色相の反転が絵のイメージにあったことがうかがえます。このように、夢で見た絵のヴィジョンと、日々窓から眺めた自然の記憶が重なりあうことで、田淵独自の色彩感覚をもつこの作品が描かれたのでしょう。　(学芸員　瀧川 織恵)

1. 田淵安一『二面の鏡』筑摩書房、1982年、P.209　2. Yasse Tabuchi, *Saisons inachevées : FIAC'81*, Fuji Television Gallery, 1981

富山県美術館(TAD)
〒930-0806 富山県富山市木場町 3-20 (富岩運河環水公園内)
TEL 076-431-2711　FAX 076-431-2712　https://tad-toyama.jp/
発行日 2019年7月1日